

みんなの環境

第9号 2007年6月20日

編集/発行 あつぎ環境市民の会

http://www.geocities.jp/atsugi_kankyo/

この夏コアジサシの雛は？

北條文彦*

○ヒナを育てる

相模大堰の直下に造成されている中州は、その広さ 7,500 m²。今まではコアジサシの繁殖の適地でした。

いつもの年ですと、4月中旬に中州付近に飛来したコアジサシは、5月初めには中州上で営巣し、卵を抱えています。そして、5月末には集団営巣地（コロニー）のあちこちで可愛い雛の姿を見ることができます。そして6月中旬にはコロニー上空などを自力で飛翔するようになります。もっとも、まだ親鳥から餌をもらっていますが……。雛となっても油断できません。チョウゲンボウやオオタカ、ハシボソガラスなどが絶えず狙っています。親鳥はこれらの障害に対して集団で防衛しております。そして無事に成長して幼鳥となった彼らは、おそくも8月の中旬頃までには、親鳥とともにこの中州から飛び去ってゆくのです。私が見たわずかな例ですが、前年に神奈川県で生まれたコアジサシが、翌年この中州に来て卵を抱いていました（脚に神奈川県を標識をつけた個体）。

○今年は営巣せず

2007年のこの夏、コアジサシは此処で営巣していないのです。どうしたのでしょうか。

高田浩氏が指摘**のように、コアジサシの餌となる遡上アユは04年 2,290～2,880万尾。05年 52～72万尾。06年 65～77万尾と変化しています。遡上アユの激減した05、06両年に中州上ではコアジサシの営巣はありませんでした。たぶん餌となるべきアユが不足したためでしょう。

2007年当初、コアジサシは4月10日初めて相模川に飛来、4月27日には中州への降り立ちも見られ、営巣近しを期待しました。5月9日にはこの夏最大飛来数となった42羽をカウントしました。しかし、結局中州での営巣は見られなかったのです。6月に入ると数は少なく、6月6日2羽でした。このように、中州では3年続けて営巣繁殖がありませんでした。今夏の遡上アユは410万尾と言われ、コアジサシの餌に不足しません。今年営巣が見られなかった原因はたくさんあるでしょうが、私は、05、06両年営巣繁殖の無かったことが大きな原因だと思っています。

○親鳥たちに伴われて

コアジサシもその習性の一つに、親鳥なり先輩鳥に伴われて、営巣地を探すのではないかと思います。無論、相模川のこの中州より、良い条件を備えた繁殖地が出現したためとか、その他いろいろの理由、原因は考えられます。いずれにせよ、この夏コアジサシがどこで雛を育てたか、それは今後、時間が経てば自ら明らかになるでしょう。 **「みんなの環境」第2号 2006/8

(*北條文彦=元宮内庁書陵部勤務 元駒沢大学講師 日本野鳥の会会員 厚木市旭町在住)

この機関紙にみなさんの環境への思いや情報を載せましょう。原稿は随時受け付けています

お地蔵さんの佇む里山〔2〕

櫻井 武

荻野鳥獣観察会立ち上げ

平成 15 年 11 月に西山の砂利採掘にかかわる「環境影響調査の報告書」が閲覧に供された。当時、荻野里山では「オオタカが生息し繁殖している」と確信していたので厚木市に対し、西山採掘が荻野里山のオオタカ生息に及ぼす影響ならびに対策の有無について、この環境影響調査の中の猛禽類調査結果の疑問点について「市長に対する手紙で」質問したところ、市長名で「荻野里山ではオオタカは生息しているが、営巣は確認出来ないので営巣が確認出来た段階で検討する」との文書回答を受けた。

意外な市当局の回答に啞然としてしまったが、そのまま放置するわけにはいかないので「自分たちでオオタカの営巣を確認しなければならない」という使命感にかられ、荻野鳥獣観察会を立ち上げ、仲間とともに荻野里山一帯で オオタカ観察に明け暮れた。

この頃、里山の尾根つたいの木立の頂上がすべてオオタカに見えてしまい夜寝しているとよくうなされた。

1 野鳥観察

昭和 54 年に移り住んでから暇を見つけては荻野川の土手を歩いた。ここには疎開先の山林や田畑で見たカワラヒワ（疎開先「コロコロ」）ムクドリ（疎開先「ムラスズメ」）ホオジロなどが生息していた。

今でも鮮明に焼き付いているが、昭和 55 年 1 月 2 日、銅座橋下流で流れが大きく蛇行している所（通称「調理場」～平成 16 年オオタカの調理場を発見し以降荻野鳥獣観察会としてそう呼ぶ～）の右岸コンクリート擁壁の突端にいる「カワセミ」を発見した。これがやみつきになり、日々の生活をとおして観察するという今の野鳥観察のものが出来たのである。まさに「やみつき鳥」に取りつかれたのであった。当時は間違いだといわれるのが心配で職場でも「カワセミを見た」と話す自信がなくて悶々としていたことを思い出す。

フィールドワーク主体の職場も幸いした。この頃の荻野川には「ヤマセミ」が生息していて地元の方は平成 7 年頃までは「あの電線に留っていた」あの「水門の柱に留っていた」などと話してくれる。忍者鳥とまでいわれる「ヤマセミ」が周辺で観察出来たのである。当時の巣穴は残っているが残念ながら姿を見ることは出来なくなってしまった。

現在は、月 1 回（第 3 水曜日）中津川で「ヤマセミ」の観察会を開催（鳶尾ヤマセミ会）しているが、観察できる確率は 5 割である。

2 子どもたちとともに

荻野里山で荻野小学校の児童たちと一緒に野鳥を観察する機会が多くなってきた。

そして、観察を重ねるたびに、荻野川を中心に生息する野鳥の観察をとおして、この里山を彼らの「ふる里」として感じさせたいという願望にかられている。

つまり、子どもの頃に体験した、ときとして手を伸ばせば届くような今でも鮮明な遥か昔の「ふる里」の思いを、児童たちが「荻野川を挟んで広がる荻野里山」を「ふる里」としてその胸にとどめることが出来れば、彼らがこれから体験するであろういろいろな事態に立ち向かうための心の支えとなるはずだと考えるからである。

核家族の中で生活する彼らにとって、「お爺さん」役として昔の里山の話をして伝えておきたい。

つぎの機会に譲るが「野鳥観察のコンセプト」はこのような視点でまとめたものであり、「観察の

フロー」は具体的な観察進行手順を定めたものである。

お陰で、地元の方と出逢うと挨拶を交わし、子どもたちとの触れあう機会も多くなった。

野鳥観察が縁で家に来る子どももいる。

田や畑で作業している方と挨拶すると「どうして知っているの」と質問してくる。

つい最近のことだが、いつものとおり犬を連れて散歩していた時のことである。

弁天橋の下流で2人の男子児童が川の中に入って川面を覗いているのに出くわした。N君とB君である。N君は家の居間からオオタカの監視場所が見えるので、いつも「オオタカの絵を書いている」とお父さんから聞いたことがある。また、『クイナを見た』と知らせてくれたこともある。

「まだ冷たいのに水に入ってなにしているの」

N君 『うん、カメを散歩させているんだ』

「どんなカメかな、見せてよ」

B君 『これ』といって手に掴んでいた紐を持ち上げた。

(紐の先きに5センチ位のカメが結ばれていて足をばたつかせていた)

翌日、校門前の坂道の途中で昨日の2人と会ったので

「カメの散歩はどうしたの」と問いかけると

N君 『うん、もう済んだ』おいら『しゅうじ』だ、隣を見てB君は『塾』なんだ。

「また、カメの散歩を見せてね」

(彼らにはすでにこの里山がふる里として根付いていることだろう)

地元の自治会報が回覧されてきた。なにげなく目とおしていると荻野小学校だよりも添付されていて、校長さんの「バードウォッチング」に関する記事が掲載されているのに目が留まった。

了承を得たので、ここに紹介させていただくことにした。

『19年1月16日～2月27日にかけてバードウォッチングを行っています。ゲストティーチャーとして大勢の方に協力していただき、荻野川付近の野鳥を観察しています。1月23日には4年生の観察日でした。「オオタカ」や「トビ」の飛び方の違いなどが実際にわかりました。また、「カワセミ」も観察することができ、子どもたちも感動していました。

この取り組みは野鳥を観察する活動をおして自然に親しみ、自然を愛する心を育てることと異学年の児童やゲストティーチャーとの交流をおして、思いやりの心を育てることを目的としています』

学校としての校長先生のお考えに直接触れることが出来てとても心強く感じるとともに責任をはたすため、これからも気持ちを新たに協力していくつもりでいる。

そういえば、3月7日に18年度最後の観察会が行われ、観察を終えて学校への帰り道で傍らに来た1人の女の子から「これ」といって草で編んだ小さな籠をもらいました。籠の中には一輪の「ホトケノザ」が活けられているのです。そんな触れあいもあるのです。胸が熱くなってしまいました。

学校の行き帰りもそうですが、会うと「今日はどんな鳥いたの」と聞いてくる子どもいます。

これからも「ふる里」を共有するため観察を積み重ねていきたいと思っています。

(荻野鳥獣観察会会長)

あつぎ環境市民の会では2007年度の会員を募集しています。

あつぎ環境市民の会は、自然環境保全、地球温暖化防止、ごみ減量、環境学習などの環境活動を実践している市民が集り、平成16年4月に発足しました。

ただいま会員(年会費は2,000円)を募集しています。お申込みは電話046-224-5010(狩野)まで。

街の自然

温暖化で生息域が広がる

ツマグロヒョウモン

最近この美しいチョウをよく見かけませんか。ここ数年の異常気象のせいかも知れません。

ヒョウモンチョウの仲間には日本に15種ほど生息しています。橙色に黒い斑紋がはいり、ヒョウ柄のような翅が魅力的です。

ツマグロヒョウモンはもともと熱帯地域のチョウで日本では静岡県以西までしか分布して



いませんでした。厚木周辺では01年ごろから見られるようになり、今では春から夏にかけて何回も発生し市街地の花から花へと飛びまわり珍しくなくなりました。分布の拡大は地球温暖化と幼虫の食草であるスマレ類（パンジー）が冬でも街の花壇に豊富にあるからといわれています。

（文 長岡 侑 写真は厚木市福祉会館前で♂ 撮影 中倉マキ子）

～私たちの活動～

市内26か所でNO₂を測定

昨年に引き続き第4回目の大気汚染物質(NO₂)のモニタリングが厚木市内26ヶ所で、6月8日夕刻から9日夕刻の24時間にわたって行われました。この測定はあつぎ環境市民の会が毎年6月、12月の年2回、定時定点観測しているもので、測定結果は毎年「みんなの環境展」で公開し市民の関心を集めています。

データは毎年蓄積され、経年の変化を読み取ることができます。私たちは街の大気中の二酸化窒素濃度(NO₂)を監視しています。

二酸化窒素は水に溶けると硝酸という強い酸ができます。硝酸は強い酸化力でものを溶かす性質があり、鉄やコンクリートも腐食します。人が呼吸によって二酸化窒素を吸い込みますと、気管支や肺の中で水分と反応して、気管支炎やぜんそくの原因となります。光化学スモッグの原因となるオキシダントの大部分は二酸化窒素が紫外線に当たったときの反応で出来、丹沢のブナ枯れの原因の一つともなっています。

みんなの環境 第9号 2007年6月20日発行

編集・発行 あつぎ環境市民の会 代表 狩野光子
電話/FAX 046-224-5010 e-mail: mitsuko-karino@ayu.ne.jp
URL: http://www.geocities.jp/atsugi_kankyo/

制作 長岡 侑 e-mail: jun.nagaoka@nifty.com
事務局 〒243-0817 厚木市王子2-14-3 山中延明 方

電話/FAX 046-224-9693 e-mail: ANA0480@nifty.com

郵便振替口座 00200-7-132779 (年会費2000円)

(C)あつぎ環境市民の会 2007年